

【研究討論】 Research Notes

金谷治先生の治学方法  
The Research Methodology of Osamu Kanaya

中嶋隆蔵  
Ryuzo Nakajima\*

---

\* 東北大學 (Tohoku University) 名譽教授。

## はじめに

昭和三十八（1962）年四月、東北大学文学部の三年生となった私は、哲学科の中国哲学専攻に進学し、金谷治先生のもとで中国哲学を学ぶことになりました。当時四十二歳を越えて間もなかった金谷先生は、朝日古典選の一冊として『孟子』の翻訳（1955-6）や、岩波文庫の『荀子』の訳注（1961-2）、サーラ叢書の一冊として『老荘的世界～淮南子の思想～』（1959）、日本学術振興会から『秦漢思想史研究』（1960）などを出されておられたものの、高校生向けの受験雑誌の学部紹介欄に有名教授として名前が出ることもなく、いわば知る人ぞ知るといった存在であられたようですが、進学して間もなく、博士課程に在籍していたある先輩から、「現在、日本の中国哲学研究では、若手三羽がらすの一人である。」と承りました。その先輩によりますと、三羽がらすとは、京都大学人文科学研究所の福永光司先生、大阪市立大学の本田濟先生、それにわが東北大学の金谷治先生を指すとのことでした。客観的に見れば、この先輩の発言は、どれほど実情に即したものだっただけの問題だったでしょうが、ともかく、その先輩の主観からしますと、当時の日本では、大学ごとに学風がひどく異なっており、一方に、朱子学陽明学的漢学の伝統とドイツ観念論とにもとづく哲学的方法を重視する学風の大学があり、他方に、清朝考証学の伝統とフランス支那学にもとづく文献批判的方法を重視する学風の大学とがあり、前者の研究は所謂教学的で主観的な思弁に過ぎず、後者の研究こそは所謂科学的で客観的な学問である。そうした科学的客観的に中国哲学を研究している若手研究者の中で、我々が学ぶ金谷治先生は三指に入るということだったようです。その後、徐々に中国哲学学界の状況を了解するに及んで、全国各地域の大学には、金谷先生と年齢がさほど違わない先生方が少なからず居り、それぞれ特色ある研究をされていることを知ることになりますが、当時は、この話を耳にして、わけもなく気持ちが高ぶったものでした。それから数年たって、当時脂ののりきった中国研究者を総動員して大修館

書店から全十巻の中国文化叢書が刊行された折、必ずや中国哲学研究分野で牽引的地位を占めていると認められたのでしょう。金谷先生が、第二巻『思想概論』と第三巻『思想史』の共編者四人の一人として名を連ねられたばかりでなく、第三巻『思想史』の序論を担当されたことを知って、進学時の興奮を新たにしたことでした。早いもので、それから既に四十年近い年月が過ぎ去り、四十代前半であった金谷先生も今や八十代半ばに入り、米寿を間近に控えられて、近年とみに体力、気力が衰えたと訴えて居られますが、それでも、昨平成十六年九月には今や戦国思想研究の中心となった感のある郭店楚簡に関する柔軟で鋭利な思索の結果を『日本学士院紀要』（2004）に発表されました。このような金谷先生の学問、ひいては先生の学問をなにほどか受け継ぐわれわれ東北大学中国哲学研究室の学風について、本日紹介できることは、不肖ながら先生の薫陶を受けた者の一人として大変嬉しいことです。

## 一、金谷治先生の略歴と恩師武内義雄先生の治学方法

### (1) 金谷治先生の略歴

金谷治先生は、昭和十七（1942）年四月に東北帝国大学法文学部文学科に入学して支那哲学を専攻されましたが、同十九年九月、戦局急を告げる中、無念の思いで繰り上げ卒業され、すぐ応召して兵役に就かれ大陸を転戦されました。敗戦により昭和二十（1945）年九月に兵役解除の後、嘱託として東北帝国大学法文学部副手に就かれ、ついで昭和二十一（1946）年十月に嘱託として旧制弘前高等学校講師に就かれ、さらに昭和二十三（1948）年東北大学法文学部講師に任命され、同年九月から一年間、京都大学人文科学研究所に内地留学、爾後、昭和二十五（1950）年六月に東北大学文学部助教授、昭和三十七（1962）年四月に東北大学文学部教授となられ、昭和五十八（1983）年四月一日に東北大学を定年退官されました。

その後、追手門学院大学教授に着任、七十歳の定年で現役教授の任を退かれ、以来、現在に至るまで研究と執筆の生活を続けられております。

関西大学専門部に在籍していたおり、漢学を担当されていた石浜純太郎先生のお勧めで武内義雄先生の著書を読んで感激され、是非とも武内先生の指導を仰ぎたいと東北帝国大学に進まれた金谷治先生は、学生として、武内義雄先生の批判的文献学を基礎とした中国哲学研究の方法を主に学ばれつつ、かたわら、当時法文学部に居られたいづれも京都帝国大学出身の先生方、すなわち中国古代中世史の岡崎文夫先生、中国小説史の小川環樹先生、中国近世史の曾我部静雄先生の講筵に列席して、いわゆる京都学派の中国研究法を研鑽されましたが、東北大学講師着任後の一年間内地留学された京都大学人文科学研究所で、経学研究室の平岡武夫先生、文学部の吉川幸次郎先生の薫陶も受けられ、京都学派の研究方法を自家菓籠中の物とされて、東北大学の中国研究の創始者武内義雄教授の後継者たるの自信を深められ責任の重さを改めて自覚されました。

## (2) 武内義雄先生の治学方法

さて、武内先生が公刊された中国思想研究の専著は『老子原始』『老子の研究』『老子と荘子』『論語の研究』『易と中庸の研究』『支那思想史』『諸子概説』『支那学研究法』などですが、それ以外のほとんどの著作をも含めた『武内義雄全集』全十巻が金谷治先生の主編で刊行されております。それらのうち『支那学研究法』は、東北帝国大学を退かれた後、支那学研究の方途をお示し頂きたいという後学の求めに応じて、武内先生の研究法の核心を自ら概説されたものです。武内先生は、この書で、漢字文化圏で歴代伝えられ、経・史・子・集の四部に分類保存されている支那の文献を基本資料にして行われるあらゆる研究分野に通ずる基本的方法として、伝来の文献をどう取り扱うかということを挙げられ、随って、文献取り扱いの方法を中心とした研究方法こそが、この書で述べる支那学研究法であると述べておられます。言うまでも無いことですが、ここで文献と

言うのは、あくまでも現在伝存する典籍に限られておりまして、つい最近発見が続いている出土文献類は当然ながら含まれておりません。

支那学の基礎を「文字学」と「目録学」とにおく武内先生は、『支那学研究法』を「総論」、「文字学」、「目録学」の三部で構成し、それぞれにほぼ同量の論述を配分しておられます。そのうち「第一章総論」は「叙説」「資料の鑑別」「輯佚」「校讐」「稽疑」「訓詁」「整理」の七節からなりますが、その第七節「整理」のところで、大略次のように言われています。

「古典の研究には、先ず第一に、真偽を鑑別して偽を去って真だけを残すことが必要である。第二に、残された真書について流伝の系統を異にする諸本を校讐し、さらに前後の文脈と句法とを吟味して稽疑しなければならない。第三に、既に校讐の了った本について訓詁を正して文字通りに理解すべきである。しかし此処に止まってはならない。我々は更に進んでその前後左右を顧みて一々の文献の地位を確かめねばならない。一つの文献が先行する文献から如何なる刺激を受け、後の文献に如何なる影響を残しているか、また同時の文献といかなる関係に立つかを知らなければならない。そのためには、すべての文献を年代順に配列して考えねばならないが、それにはまづ第一にその背景をなす歴史に通じなければならない。・・・しかし歴史の記載はすべて伝統的な通説で、我々は更に深く掘り下げて伝統的解釈を是正しなければならない。・・・ただ、こうした研究は独断に陥りがちであるから、厳正な尺度標準が必要である。・・・この尺度標準の一つとして江戸時代享保年間（1716-35）の学者富永仲基が『出定後語』で提唱した、一切の思想学説は前に存したものの上加えるところがあって発達していくという「加上法」の考えに注目したい。」

『支那学研究法』の中で、武内先生は、「清朝考証学の方法を研究していき詰まりを感じていたが、富永仲基の加上法の考えに出合ってそれを打開することができた。自分の仕事に新生面があるとすれば富永仲基の方法に依るところが大きい」と述懐されているところからすれば、ほぼこ

の書に見える方法論を以て武内義雄先生の研究法と見て大過ないと思われ  
ます。

## 二、金谷治先生の治学方法

先に述べましたように金谷先生は、武内先生が開かれた東北大学の中国  
思想研究を継承発展すべき重責を担うとの決意を固められ、また、中国の  
古典の価値が見失われその意義が軽視されつつある今こそ中国の古典を江  
湖に広く紹介しなければならないとの自覚を持たれて、前世紀後半、そし  
て二十一世紀に入った現在も、日本における中国古代思想研究の牽引車の  
一人として旺盛な研究・教育活動と啓蒙普及活動とに邁進されております。

金谷先生は京都大学へ提出された学位論文を修訂した『秦漢思想史研  
究』を公刊されたことによってつとに第一線研究者としての地歩を固めら  
れましたが、東北大学を定年退官されて数年の後に公刊された『管子の研  
究』によってその地位を不動のものとされました。そしてこれら二つの書  
に収められなかった主要な論文は、門弟子の協力のもと『金谷治中国思想  
論集』全三巻として刊行されております。

### (1) 『管子の研究』～武内学の継承と発展～

私が見るところ、『管子の研究』こそは、文字通り、恩師武内義雄先生  
の方法を自家薬籠中のものとされつつ、ご自身の新生面をも開かれた代表  
的な著作であると認められます。

さて『管子の研究』は、「序章《管子》と管仲」「第一章《管子》とい  
う書物」「第二章《管子》八類の検討」「第三章「経言」諸篇の吟味」  
「第四章《管子》の思想（上）」「第五章《管子》の思想（下）」「終章  
思想史上における《管子》の地位」「結語」という構成をとりながら、春

秋時代の名宰相管仲の著として伝承されてきた『管子』という書物の成立過程を究明し、書中にもられた多様な所説の特色とそれらが展開推移してきた過程を追跡し、そうした『管子』の成立過程が春秋末期から戦国時代を経て秦漢期へと展開推移する中国古代思想史においていかなる位置を占めるのかを考察しようとするものです。

先ず「序章《管子》と管仲」で、羅根沢氏の『管子探源』や郭沫若氏らの『管子集校』ほかの従来までの代表的な『管子』研究の経過を辿りつつ、残された問題点を整理した後、『史記』その他に見える管仲の伝記と説話を検討し、管仲の確実な事跡と認められるものは少なく、本来の伝承があったとしても年月とともに逐次潤色されて新しい形になっていることを見出し、この伝承の潤色過程と『管子』の編成過程とが大きく関わりを持つだろうと想定した上で、「第一章《管子》という書物」において、伝存『管子』諸本についてその祖本と系統、変遷の過程を考察して、その存在が戦国末には確認されるその書は、前漢を通じて広く読まれて前漢末には五百六十四篇にも及んだが、その雑多な集積を劉向が八十六篇に定着した。その後十篇が失なわれたものの七十六篇が現在に伝えられている。従って、大綱においては伝世の今本の本文によって劉向の定着本を想見してよいが、問題は、この八十六篇がどのように成立してきたかを思想内容を吟味して歴史的に解明することだとする。「第二章《管子》八類の検討」では、八十六篇からなる劉向定着本が「経言」「外言」「内言」「短語」「区言」「雑篇」「管子解」「軽重」の八類に分けられているものの、はっきりしたまとまりがある「管子解」「軽重」とある程度のまとまりが認められる「経言」「外言」「内言」を除くと、それぞれの分類におけるまとまりは曖昧である。ただ、全体の中で「経言」に分類された諸篇には、戦国から漢初にかけて『管子』のことばとして引用されるものが集中していることから考えて、資料として由来が古く『管子』の中核的な思想を窺う上で重要であるとする。かくして「第三章「経言」諸篇の吟味」では、「経言」諸篇の成立順序、諸篇それぞれの所説、「経言」全体に共通する思想傾向が考察され、結果、「経言」諸篇には、戦国的な富国強兵のソロ

～ガンに沿って、経済的な充足と軍備の強化によって天下国家を安泰にするという現実的目標を置き、その実現のために土地と結びついた農業経済を主としつつ、道義の重視と信賞必罰法令必行とを併用し、さらに天地自然に模範をとるという儒道法を折衷した一種特別な政治思想があるとする。続く「第四章《管子》の思想（上）」と「第五章《管子》の思想（下）」とは、「経言」諸篇をゆるやかに統括するとして抽出された一種の特別な政治思想がそれ以外の諸篇でどのように現れ、どのような展開を示し、どのように関連し合っているかを究明すべく、政治思想、経済思想、法思想、強兵思想、時令思想、哲学思想に分けて検討する。「終章思想史上における《管子》の地位」は、「稷下の学と『管子』」と「『管子』諸篇の思想史的展開」との二節を設け、先ず「稷下の学と『管子』」では、戦国中期の初めに齊都臨淄の稷下に官立の学宮と学士の住宅が整えられ学者優遇策が行われ始めてから、戦国最末期に秦によって齊が滅亡させられるまで、中間に盛衰変化はありながらも継続して存在したと見られる稷下学団、中でも管仲を尊敬する齐国土着の学士達こそが管仲学派として『管子』を定着、伝承、続成、増補することに中心的役割を果たしたのであるが、ただ「軽重」諸篇は秦漢期以後、当時の経済コンサルタントなどをも含めた学士達が社会的要請を反映して著述したものであろうとする。次いで「『管子』諸篇の思想史的展開」では、現存七十四篇それぞれについてそれぞれの成立時期を想定した上で、戦国中期前半から前漢武帝期までに至る思想界の動向をにらみつつ、儒道法陰陽を折衷した管仲学派がどのように彼らの思想を形成し、展開していったかの軌跡を辿り、その古代思想史における独自の位置を見定めようとする。

以上、その書物の構成、検討の順序、論証の手続き、結論の提示を一瞥するとき、そこに金谷先生が恩師武内義雄先生が『支那学研究法』で示された研究方法を駆使しつつ、それに精密周到な思想分析の手法を加えて、内容雑駁にして難読なる書物として名高い伝存『管子』を解剖し、その書の形成過程。



## (2) 新出土文献の研究～温故知新の治学方法～

ところで、前世紀の七十年代、金谷先生が東北大学に在職された時期の後半になって、中国では銀雀山漢墓竹簡、馬王堆漢墓帛書、雲夢秦簡、睡虎地秦墓竹簡などといった秦漢期の文物の発見が相次ぎ、つい最近には戦国中期末郭店楚墓竹簡なども出土し始めたことは周知のところ。武内義雄・津田左右吉の両碩学や木村英一・赤塚忠・渡辺卓・小野沢精一ほかの学者達がもしご存命、ご活躍中であつたならば、必ずや勇躍率先して研究に取り組みましたことでしょう。これらの新発見資料に対して、金谷先生はいち早く積極的に取り組みました。中国での主なる研究報告にいち早く目を通されながら、同時にそれらの報告を精密に検討しつつ、解読された諸文献を自ら周到に考察され、自らの見解を示されておられます。先に挙げた『管子の研究』には、まさしくその成果の一端がもられております。ここに、伝来の典籍を考証学的手法と思想学的手法とを併用して批判的に検討することに加えて新出土資料の研究成果をも積極的に活用するという進取の気象に溢れた先生の積極的な姿勢が前面に出されております。

『管子の研究』は私の見るところ、武内先生が東北大学退官後に、後学に請われてその研究法を示した『支那学研究法』と同様、金谷先生が東北大学退官後に、新出土資料の研究法をも含めた先生の研究法の実際をわれわれ後学に広く示されたものですが、先生は『管子の研究』を公刊された後も発見が続く新出土資料に旺盛な関心を維持され、研究の手綱を緩められません。そして、その精密周到な考察の一端を「楚簡《性自命出》篇の考察」と題して平成十五年秋に日本学士院で発表され、平成十六（2004）年九月の日本学士院紀要第五十九巻第一号に学術論文として公表されました。

この論文で、先生は、墓葬年代が戦国中期偏晩と認められる郭店楚墓から出土した竹簡《性自命出》篇について、上下二篇の分段を考える整理者の見解に疑義を呈し、内容からすると上中下の三篇に分段すべきではないかとされ、また、整理者達が、此篇と伝世の典籍《中庸》との間に、使用

される主要概念や句法が類似しているところから、両者を同時期同一学派の著作とし、秦漢の際の成立と見られてきた《中庸》の成立を大幅に繰り上げるべきであるとし、多くの研究者達がそれに同意しているかに認められる近年の研究動向を挙げて、果たしてそうであれば、《中庸》の成立について定説視されている従来の見方も訂正されなければならないとした上で、しかし、果たしてそう認定することが妥当かどうかを原文の文脈に沿って精密周到に検討され、その結果、まったく否定的な結論を提出されております。その見解の概略は、ほぼ以下のようなものです。

両者の間には使用される重要概念と句法とにおいて大きな類似が存在していることは確かである。しかし、だからといって、両者の間に、思惟方法、関心の所在、主要概念の意味づけ、思想の成熟度などの点で大きな相違が存在していることを無視するわけにはいかない。内面的な「天命」や「性」や「誠」を重視する《中庸》の立場と「情」や「物」といった外面的経験的具象世界に重きを置き「教学」や「道」の客観的性格を重視する《性自命出》の立場とは、まったく対照的な違いを持っている。この思想的立場の差異を無視して両者を同時期の同一学派の著作と認めるわけにはいかない。戦国中期に《性自命出》のような思想が存在したことは確かだろうが、それは後に戦国後期の荀子の思想にこそ連なるものであろう。他方、《中庸》の思想は、戦国中期末の《孟子》の流れに連なるもので、従来通り秦漢の際に成立すると見て不都合はない。

また、この論文で、先生は蛇足ではあるがとしつつ、一般論として二つのことを提言されております。一つは、

*新出資料の解読や考察に当たって、伝世の旧資料を有効に使うことは必要な方法であるが、形式的な類似に惑わされて基本的立場の違いを見過ごしたりするのは警戒しなければならない。*

ということ、もう一つは、

一般に新出土資料については、一応のまとまりを持ってはっきりした主張をつらぬこうとする著作的な資料とまとまりのない断片の集積と見られる資料群とに分けられるが、その中間に編成途上の資料群があると考えられる。……新しい出土資料を、いつの場合にも、既に完成された資料としてあったものが、時と共に乱れた結果として出土の現状があると考えただけでは足りない。

ということ、この二つです。

私は、金谷先生の後を承けて東北大学で中国哲学の研究に従事している者ですが、生憎戦国秦漢の思想史研究を専門としておりませんので、当該問題について適切な論評を下すことができませんが、論争当事者の立場から一定の距離を置く門外漢としての立場からみる限り、金谷先生が『管子の研究』で実際に示された治学方法とそこから導き出された成果とは、多くの人々の同意を勝ち取るものではないかと考えておりますし、「楚簡《性自命出》篇の考察」で示された方法と結論、そして新出土資料研究に対する二つの提言に対して心から共感しております。

## むすびにかえて

先頃、金谷先生門下の友人で同じく東北大学で中国古代思想史研究を進めている浅野裕一氏から、氏の楚簡関係の研究論文が台湾で漢訳出版されたものだという一書を頂きました。本を紐解きますと、その末尾に漢訳を監修された先生の後記があり、そこに、現在は中国思想研究における所謂典範転換の時期であり、武内、津田両氏によって開かれ金谷治先生などの努力によって現在の日本の中国研究全体に一般化している研究法は大転換を迫られている、といったことが書かれておりました。遺憾ながら私はトーマス・クヘンの書物を精読しておりません。わずかに同僚が翻訳紹介した解説書によって、クヘンのパラダイム転換の理論を垣間見ただけです。

それによりますと、ク～ンのパラダイム転換の理論とは、天動説から地動説への転換とか、ニュ～トン力学からアインシュタインの相対性理論への転換といった、人間の自然認識において、その認識方法が全面的かつ根本的に転換するという次元でのことをさしているもののようなようです。そのような理解を抱いていた私は、この監訳者の様な理解では、通俗化も此処に極まったなあ、と吃驚仰天してしまいました。

思想史の研究、その一分野である中国思想史研究において現在行われつつあるパラダイム転換とは一体どういうことを指すのだろうか、と考え込んでしまったのです。確かに近年来、日本では、古典学の再構築という題で大々的に研究プロジェクトが生まれ、多くの研究者がそれに参加し、最近続々と作成されている電子媒体を活用しての研究がおこなわれたことは事実ですが、果たしてそれによって驚天動地の革新的方法論が創出されたのかどうか、あれこれ考えてみましたが、その方面の事情に通じない私にはよく分かりません。

振り返るまでもなく、前世紀以来、中国思想研究の進展に対して大きな作用を及ぼしたのは、資料面では、甲骨金文資料の出土と敦煌資料の発見であり、方法論では、修身教化の学から科学的研究への転換と欧米における思想研究法の紹介ですが、近年多くの研究者の関心をよんでいるのは、もちろん戦国秦漢期の出土資料の大量発見という資料面のことがらです。

従来未見の同時代資料が大量に出土して来ているわけですから、これまで伝世資料を主にして研究され結論が導かれ定説と見なされてきたものが、此処にいたって新出土資料をも加えて総合的に見直されなければならないことはまったく自然のことであり当然のことです。しかし果たして、これが果たして研究法にとっての「典範転換」を意味するといえるのかどうか、私にはまったく理解できないところです。新出土資料を十分に活用することによって、伝世資料を主に組み立てられてきた従来の古代思想史が書き換えられなければならないことはその通りでしょう。しかし、新出土資料の研究といってもそれに携わるにはしかるべき方法が必要です。私を見る

ところ、中国にしる日本にしる、しかるべき研究者の大部分は従来までの伝統を踏まえた文字学・音韻学の方法を縦横に駆使してそれらの資料を解読し整理し、さらには歴史学の成果や思想史学の方法を用いてその資料の歴史的位置を定めるという、今日通用の研究方法を用いているようです。勿論、学者によって、資料に見える文字や語句をどう理解し、バラバラの状態出土した簡と簡とをどう接続するか、いちおう整理された文章の段落をどう分けるか、記録されている文献の初出時期をどこに定めるか、などにおいてかなり違った結論が出ているようです。しかし、これはそれぞれが用いている研究方法の違いに基づくというよりも、実は、研究者それぞれの性向や好尚、視野の広狭、研究方法運用の生熟や精粗などに基づいているようです。

私が見るところ、新出の資料を積極的に活用して従来までの鳥瞰図の修訂を迫ることと、新出資料に直面した研究方法の一新を図ることとは、決して同一ではありません。金谷先生の治学方法とその成果とに思いを及ぼすとき、私は、武内先生が樹立され金谷先生が継承発展された治学方法が、新出土資料と伝世資料とを共に用いることができる現在の中国思想研究において、その存在意義が失われるどころか、却ってますます重要な役割を果たしうることを再確認するものです。